

---

# さんすうリズム

あゆみかん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さんすうリズム

### 【Zコード】

Z9816E

### 【作者名】

あゆみかん

### 【あらすじ】

【SF／数字／哲学／全10話】 天才ゆえに理解してもらえず苛立ちながら過ごしてきた幼少。年月をかけて得たものは弟子。諦め忘れかけていた時間が今、再び動きだす

企画参加作品。

## 000】 フィギュア・サークル【（前書き）

SF小説企画『空想科学祭』の参加作品です。

サイトはコチラ

<http://sffest-a2008.soragoto.net/>

e t /

宣伝用ブログはコチラ（漫画版あります）

<http://ayumanjyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-109.html>

この物語は、フィクションです。

# 〇〇〇【フィギュア・サークル】

時は未来。

そして何処かにある、根源が数字の場所。物は全てプログラムで出来ており、一度バグると元には戻れない。バグる事など許されない世界。

一人の天才は、バグ化からの再生を夢見ていた。

されど、

彼を理解できる者はいなかつた。

神よ、願わくは ただ ひとりでも。  
彼を理解できる者の存在を認めてほしい。  
ただ ひとりでいい。ひとりでも。

ひとりでも。

未来に光さす者の存在を与えたまえ。

■ ■ ■ ■ ■

テスト生、加藤あずさ。

灰茶のツナギに  
さすまたに似た棒状の武器を持ち。もう片手に

は試験に重要な『探索爆弾（サーチ・ボム）』を3個ほど、各指と指に挟んで持っていた。

『探索爆弾』とはスーパー・ボールのようで弾力性があり、その球の表面には大きく“サーチ”を表す“S”が書かれている。安価で、色も豊富である。

『試験番号 P 1029。加藤あずさ。テスト開始』  
抑揚のない機械の声のアナウンスが場内の天井、隅の箇所箇所に取りつけられた拡声器から響く。始まりを知らせる。

あずさは張り切って武器を振り上げた。「行きます！」

田の前の『敵』と対峙する。

ギシャアアアアアツ！

怪獣である。2階建ての建造物くらいはある全長の。黄土色の皮膚に覆われブヨブヨとして垂れ下がる肉は、動きをより鈍らせる。どう見ても小さいあずさの方が若さもあつて俊敏だつた。

直立2足歩行をしながらあずさに迫る。水晶玉のように透明で大きい両目はあずさを睨み見下し、口ダレのこぼれて落ちるしまりのない裂けそうなほどの大口からは呻きの声が生臭い息と共に吐かれていた。

ドタドタと。土ボコリを散らしながら懸命に駆けて来る。ちょっと同情心が沸いたあずさだつた。

「でも、ダメ！ だもん、ね！ ギドンちゃん」

敵を勝手にギドンと名づけながら、あずさは頭の中で蓄積された“教え”的言葉を順番に呼び起していった。

まずは急所を探す『探索爆弾』だ、あずさ。

あずさは、一個ずつ指と指に挟まっていた3個の『探索爆弾』を

敵の足元めがけて放り込んだ。ボンッ、ボボン！

ギドンはひるみ直進を止め、クラクラとめまいに翻弄された。白い煙が砂ボコリに混じってギドンを囲み襲いかかる。だがダメージはない。『え？』何故ならば。

この爆弾は。

「みーつけ！」

はしゃぎ飛び跳ねる あずさ。

ギドンの出っ腹の下部に大きく“1”という数字を見つける。『探索爆弾』は、突如 浮き出た この数字を出すためだけの物なのである。

「はあい先生！」

敵の身体の何処かに『数字』が出てくる。

そこに出でた『数字回数分』、『攻撃』しろ。

元気よく記憶の中の声に返事をした後、あずさは武器の棒を思い切り振り上げ体を後ろに反らせた。「せえの」

そこが、奴の。

勢いよくギドンの『数字』の書かれた箇所へと放り投げられ、グサリと突き刺された。「ピギャアアアア！」

断末魔の悲鳴を上げて、怪獣は……ちゅどくん！ という笑いのよつな暴音と共に爆発し炎上した。モウモウと、白い煙ではなく今度は黒い煙が立つ。

中で煙が こもらないよう室内業務用の大型空気清浄機はフル活動し、ドーム状となっていた天井からはスプリンクラーが自動で発動、爆発地点へと集中豪雨を浴びせていく。無論、あずさは お先にと。陽気に口笛を吹きながら早くも現場から退散していた。

“教え”の声の最後ひと言は、あずさには もう必要ないよつだつた。

そこが奴の、『弱点』だ……

「まだまだ甘いな」

試験用にと設けられた屋内の大地。土砂の山やジャングルを真似た常緑樹林で敷地を造られる。

そこでの あずさの試験概要を、2階 外壁の窓越しに見物していた一人の男。水島竜代、まだ若い。

彼は長く纖細そうな毛質の髪を一つに まとめて、白衣を着た背中の上に垂れ流していた。

『テスト終了 テスト終了……』

後始末に忙しい機械達の作動音が やかましく。テスト終了を告げる明るいポップ音楽が流れるも、演出 効果は皆無に等しかった。  
……

。 地球とは違う星という意味での別世界、『フイギュア・サークル』

。『数』『数字』『情報』を根本とした世界。万物は、数と数字で出来ている。

形成されるに必要なのはプログラム。しかし算譜を奏でた神の正体は未だ明かされては いないという。

バグると『野獸化』する。

「敵の急所ナンバーを探して、そのナンバー回分、出てきた所に……」

…」

と、おさらいしながら。あずさは服を制服に着替えて、試験現場を囲んでいる2階外壁と窓を越えた廊下へとスキップしていた。  
「機嫌なあずさの向かう先には、竜代が待つてくれていた。  
師と弟子。

竜代とあずさ。

本日はあずさが一人前になれるかどうかの試験の日である。  
「攻撃！……でしょ！？先生！」

と、太陽のよくな眩しい笑顔で手を振りながら、竜代におさらいの確認を求めてみた。顔全体に、『樂勝！』という文字が浮かぶ。

「油断しすぎだ」

ゴン。

「ああ～」

……あずさは竜代の鉄拳を頭上から食らった。「あたた……」

頭を抱えていると、竜代は冷ややかに説教をした。

「あれじややられる。試験用の野獸だからよかつたものの「ふえ～ん……先生……」

人が数人、廊下を歩き2人の横を通りすぎて行つた。白衣、作業着、制服を着た生徒。あずさは竜代に殴られ、「痛いい～」とまだ唸つている。

「ま、基礎はOKだけどな」

さりげなくフオローをしていた。「……！」

あずさは顔を赤らめた。基礎はOKと言つた瞬間の竜代の顔の、微笑みパンチが特攻的に効いたらしい。

(あひやあ～……)

そう、まんざらでもない。師弟関係だけかと思いきやだった。ただ、竜代の方はどうなのかは不明だが。

ピンポロンパランポロ～ン……

電子音の後、2人のいる第5棟構内に人の声でアナウンスが響き渡る。

『テスト生 加藤あずさ。テスト生 加藤あずさ。担当員 水島竜代。担当員 水島竜代』

2人は同時に上を見上げた。「ん？」

『至急 管理 局長室まで来て下さい。繰り返します。至急……』

「俺まで呼び出しか……行くぞ、あずさ」

竜代は聞くとすぐカーブを描く廊下を歩き始めた。「先……」

あずさは、竜代に呼びかけるようで……止めて俯く。「……」

竜代のあとを追った。

(先生は、頭がよくて……もつと出世出来るはずなのに)

あずさの胸の内を締めつけていた。

(テスト生の教育係なんて下っ端の仕事してる……)  
歯がゆさが、あずさの胸中を支配している。

呼び出された管理局長室にて。

ホログラフィック式のドアの前に立った2人は依然、黙つたままだった。

「水島竜代、加藤あずさです。失礼します」

「入りましたえ」という声が中で聞こえた後、ひと間を置いて、竜代が先にと光カーテンのドアを通り抜ける。あずさも後ろからついて行つた。

富殿並みに大広い室内の天井には富裕や上層階級の象徴となるべく光散乱性が高い反射性ガラスをふんだんに用いたシャンデリア。照明の役割はあまり果たしてはおらず、装飾の面で備えつけられたものにしかすぎない。室内は暗かった。

足を踏み入れたばかりの頃は数人の黒影にしか見えなかつたものも、次第に日が真正面の窓からの逆光に慣れてくると人物をそれぞれ目視で確認できた。

まるでシアターにでも訪れたのかと思われる臨場感で、あずさ達は迎えられた。

壁が窓で一面となつてゐる前に、あずさ達を囲もうかとしている、横に連なつた磨きかかつた黒の上質な机。左右の端と端には、ホログラムなのかどうか見ては わからないが背の高い観葉植物の暗い緑が生い茂つていた。

机の真ん中……机自体は部屋の やや窓寄りの中央に位置するが、これまた上質で鉄に木柄の上塗りを固めたとも見える素材組みの背の大きなイスには、一人の貫禄づいたスーツを着てゐる年老いの男が座つていた。

年の頃は50代前後だろうか。顔や首、机に つかれた両肘の先の組まれて見える手の甲や各指には、年季の入つた幾重にも なる皺の皮膚で覆われてゐる。

「一ティングされたような硬い整髪で、俯き加減に あずさ達を上目づかいで見る。

決して睨んでいるわけではないが、厳かだった。ひと突きで脆く砕け散るガラスの空氣だった。

「この男が局長である。管理局を執りしきつていた。

「足労だつた、水島」

局長はピクリとも動かず。事務的に声をかけた。

あずさは、緊張で背筋が強張る。ゴックン、と気を最大限に遣いながらも唾を喉の奥へと飲み込んだ。

（ホンモノの局長だア……）

感動は隠れてしまつてゐる。局長クラスの大物に対面した機会など これまで なかつた。金縛りにあつてゐるに近い状態。身動き不可能な切迫感で身を縛られていた。

(すう)く男臭い部屋だなア……)

緊張の呪縛から逃げようと、頭脳回路は脱線を試みている。

「合格おめでとひ」

「へ?」

まづかつた。僅かに脱線していた あずさは、虚を突かれた。

「先ほどの試験 結果だ加藤君。君は今から晴れて一人前の算術師として働く、許可と資格を得たのだよ」

それを聞いた あずさは心臓が飛び上がりそうになりながら「はつ、はい！」と慌てて返事をした。背筋も同時に さらに真っ直ぐに張る。

「まあ、……」

局長に変化があつた。口元が微かに動く。目を伏せ、ふ、と小さく息を吐いた。

「当分、彼の元で修行する事になるのだがね そんな事を告げながら」

「……」

指された竜代は立つたまま無言だった。あずさの脳裏に次の単語の数々が思い浮かばれる。

階級、社会、組織、上層、官僚、貴族、エリート、学歴、身分の差、天下り、大御所、権力、金持ち、じわじわ……

下層から、一般局員、支部局長、総部長、局長……と上層に向かつて階級が並ぶピラミッドが想像の中で出来上がっていた。

「早速だが」

局長はガタと立ち上がり。少し離れた壁際に待機していた、部下である若い黒スーツマンに向かつて、パチンと軽い音を立てて指を鳴らした。

若い部下の男は即座に反応しカード型のリモコンをスーツの内ポケットから取り出して、親指ひとつで操作した。

ピ。操作の対象それは局長の背後に ある、ほぼ全面の窓ガラス  
へと。

結果 映り出されたのは、何処かの地形。円線と緯線と経線が交  
錯している、あずさ達に とっては未知の場所だった。

ひと際 目立つ赤い点が ひとつ中央付近にポツリと。局長の指  
す指は、それに注目せよと指していた。

「初任務だ2人とも!」。『地球』へ行つてもらつ

僅かに傾いていた眼鏡を直しながら、局長は そのレンズの奥に  
ある小さな目を……鋭く あずさ達に光らせていた。

初任務だあ  
！？

地球上で。

制服姿のあずさ。白いブラウスの襟を出し卵色の手編み風セーターを着て、茜地チェック柄のリボンを胸元に着けている。同じチェック柄のスカート、黒のハイソックスを履いて半端に伸びていたストレートの髪は後ろで きちんと ひとつに束ねていた。

軽量 小型パソコンの入った指定カバンを肩から さげて持つている。

私立チユートリアル学院 中等部 施設前の昇降口で、あずさはキヨロキヨロと目を運ばせ登校してくる生徒を眺めていた。

しかし結構な時間が過ぎていくにつれ。ついに ため息をついてしまう。

「先生まだかなー。何処に いるんだろう……」

待ち合わせてているわけでは なかつたが、同じ地、同じ日に来る事には なつていたはずで。あずさは童代が通りがからないかと期待して待ち伏せていたのだった。

後ろを振り返り、ビル並に高く そびえたっている校舎を見上げた。奥にある体育館と思わしき建造物の屋根のソーラーパネルは、空で さんさんと輝き放射している太陽光エネルギーを電力に変えて思う存分に これでもかと機能して働いている。

体育館の周辺には、車椅子に座つたお年寄りや小等部の生徒達が集まつて騒いでいた。これから何かしらの競技でも屋内で するのだろうか。車椅子に乗つた人の手には、厚さは薄いが一見スマートフォンにも見える物を持っていた。

見える物、とは言つたが。実際には そうだつた。それ ひとつで通信や意思表示ができる。ただ、扱う者が高齢者や障害者などの場合は機能の面で第2、もしくは3者の手によつて使用範囲が制限される事となつていた。

学院内は完全アクセシビリティ（バリアフリー）化をめざすと校訓のひとつとして掲げられている。

あずさが校章の上掲された壁を見ると、ちょうど予鈴が鳴つてしまつた。有名作曲家が作曲した覚えやすいメロディが響いて始まりを知らせている。

チンチロリーン。……

「もう先に来てるのかも……」

あずさは待つのを諦めて、昇降口の中へと消えていった。……

1年A組の教室では、数学の授業が行われている。

「この場合。 - 1 + × に対しても軸方向に「

と、教壇に立つた竜代の授業が行われていた。

新任の挨拶は簡単に済まし、黒板ではなく電子ボードの前で生徒に関数を教えていた。横長のデスクは その形を緩やかに弧を描いて階段上に幾重にも並び、生徒は連なつて各イスに座り教師の授業を受けている。教壇に立つ者の話は充分に聞き取れるよう配慮がなされていた。

そして生徒は入学時に支給された小型で軽く薄いノートパソコンを開き、キーボードで字を打つたりペンタッチで直に書きノートをとつたり、隠れて好みの絵を描いたりと自由に使えるようになつてている。

インターネットでアニメや自分の家の隣近所の様子などが見放題だが、残念ながら授業時間の間は禁止され回線は強制的に遮断されている。

視力や聴力の弱い生徒にも負担が かからず済むように、パソコンでボードの字を見たり繋げた補聴器 越しで教師の声を聴いたりと。

顔を、ボードや教壇に向ける必要性は特に ないのだが。

(……)

竜代は、ふと気が つく。

自分に向けられている女生徒達の熱い視線に。

比較的、女生徒の方が人数の割合が多くつた。そして。瞳にハートマークを作り、竜代の端整な顔を見ているだけなのか好き勝手に妄想と暴走しているのか、心の中から王子様とでも呼びかけているのかは わからないような顔で授業を受けていた。

竜代は頭をポリポリと……搔く。

(何だか やりにくいなあ……)

明日から仮面でも被ろうか、と あまり笑えない冗談を思いついていた。

そんな竜代の思いとは裏腹に。

女生徒達の それぞれは単純に喜びあつて噂していた。

(「新任の先生、当たり！ これから数学 好きになれそー」)

(「めちゃイケ顔じゅーん」)

と、机上に開けているノートパソコンに隠れて前後と左右の席同士で囁きあう。

そして それらはバツチリと。タッチペンを持つ手を小刻みに震わせている あずさの耳にも届いていた。

ふうつ。

両ほっぺたは、風船のように膨らんでいる。  
怒つてい……た。

(先生が教師で勉強を教えてくれる……それは いいんだけど(ツ)完全なる嫉妬。こめかみ あたりがピクピクと動いている。  
グググ……。

ペンを握り潰すくらいに強く突きたてて持っていた。

(先生は絶対に……わ、た、さ、な、いッ！)

一度 燃えたぎった火は消せそうになかった。

「次の問1。加藤あずさ」

続けて授業を進行していた竜代は、あずさを当てた。劫火の勢いで あずさは答える。

「 $x = 1$ です！」

イスから乱暴に立ち上がりてコブシを握っていた。

「 $x = 2$ だ」

竜代の冷ややかな返しが あずさへと。

授業は問題なく普通に終わっていった。

(答え間違っちゃつた……)

先ほどの授業が終わり、休憩時間。あずさは机に突っ伏して答え間違いを悔やんでいた。きっと後で竜代に こいつ 酷く叱られるのは、と思いながら。

落ち込んでいる あずさに、クラスメイトの女子が3人やって来て声をかけた。「加藤さん！」

頭を上げて声の した後ろを振り返ると、「おーい、転校生！」と。小さな小花の装飾されたピン止めを着け肩まで伸びた髪が可愛らしく外ハネになっている女子が白い歯を覗かせていた。

隣には、肌が色黒だが大人っぽく見せようとストレートのロング毛を垂らしている女子。

さらに その隣には、ショートヘアで目立ちそうになく地味で小柄な女子が いた。

3人は3人で盛り上がっていたようで、まだ転校してきたばかりの あずさに気軽に呼びかけに来てくれたのだつた。

「次、理科室だよ。一緒に行こ！」

高めのテンションに あずさは驚いて目を丸くしてしまった。

あずさが戸惑つたのには、違う理由も あった。「どうしたの？」不思議に思った内の ひとりが聞いてきた。

「う、ううん！ 何でもない」

慌てて次の授業の用意をし始めたのだった。

違う理由。そう。

あずさは、こういつた『集団生活』というものに不慣れだった。と同時に、学校で友達同士で笑いあつた事などない……。

地球に来て、地球の学校に来て、地球の友達と時を過ごす。全てにおいて あずさにとっては新鮮な事だった。初めてだつた。

感激に、しばらく酔いしれる。

(忘れてた！ 私、今日から『地球人・中学一年生』だつたっけ！) あずさはパソコンを持って彼女らと会流し。談笑しながら教室を出て行つた。

理科室までは外庭に繋がつて いる渡り廊下を通らなければ ならない。行き交う生徒達とも すれ違ひながら、あずさ達は2人ずつ並んで歩いていた。

「ね、ねえ。最近さ、変わつた事つて なかつたかな？」

緊張から だいぶ打ち解けてきた あずさは。いい調子のまま、聞きたかつた事を聞いてみる事に した。女子達は お互ひの顔を見合させていた。

そして3人とも あずさを指さしてみたりした。

「いえ。私の事では なくてですね……」

おいおい、と あずさは心中でツッコミを入れる。本日 転校生として参つた あずさは その対象になると言つているのだろう。「だあーつて、こんな半端な時期に転校生と… 新任の先生が来る

だなんてさ。珍しい事でしょ？」

ピンどめの女子が言った。もつともである。

「や、それは そつなんだけど。もつと別の事で何か ないかなと

……」

あずさは身を引く思いで謙虚になつた。何か手がかりはないかと……期待しながら。

「別の事お……？」

「えー、何だろう」「うう

疑問が飛ぶ。渡り廊下は通りすぎ、上の階へと行くためにエレベータの呼び出しボタンを押した。隣に螺旋状に上へと続く広めの階段もあるが、大概の生徒は樂をしたがつて使わない。たまに授業中に、節足動物をモデルとして造られた円形の虫型お掃除ロボが床の上を這いずりまわつて床を磨いているさまが見受けられる。

「せういえば「ヨイツ、先月 先輩に告つて振られたんだってよー」「言つづー！？ それ今ここで！」

と、話は脱線しそうな気配だった。すると次の授業を知らせる予鈴の電子音メロディが流れた。

リンリンリン。ポリプロピレン。

エレベーターの開閉ドアは開き、あずさ達は乗り込んだ。上の階へと動き出す箱の中で、あずさは軽く息をつく。

（手がかりなし、か）

本当は舌打ちしたいくらいだったが、諦めて壁に身をもたれさせて落ちつけた。

（まあ いいや。後で先生に……）

目を伏せていると。

地味だったショートヘアの女子が いつの間にか あずさの隣に来ており、耳元で囁いた。

「出るのよね……」

と。

真顔で、坦々と言葉だけを吐くように呟いた。

あずさは黙つたまま。女子の言い出した事に耳を傾ける。2人の前にいるもう2人の女子は女子で、何やら巷で人気の田舎カフエやスローフードの話などで盛り上がり騒ぎ、こちらの会話は耳には入っていないようだった。

「私、放送部なんだけど……」

聞いていなくても構わず。ショートの女子は、あずさの方ではなく自分の前を見ながら言つ。

「先輩達が言つてたの。放送室、美術室、音楽室、理科室、保健室……校内中を、『化け物』が徘徊してるって」

何処か暗い表情の彼女が言い終わると、エレベータは4階に辿り着きチンと甲高い音をたてた。

開いたドアから、あずさ達は出る。あずさは傍目には、わからないうが、心中では敏感に反応していた。

（あるじやん！ そーいう噂！）

ただの噂だったが、手応えを感じて手を固く握り締めていた。

超高層マンションの34階。窓から見える東都スカイツリーの期間限定ライトアップは、ひと際目立ち、都会一帯での甲夜の主役となっている。

脇役となつた周囲のビル街光を眼下に見下ろして、竜代は淹れたばかりで熱いマグカップに口をつけながら、あずさの話を聞いていた。

あずさが話し終わつた後、竜代は特に驚きもなく香り立つコーヒーをゆっくりと味わい飲む。

「人間だつて鈍感じやないぞ。噂くらい別にあつたつて、それが普通だらう」

竜代の立ち姿が映つてゐる光機能性セラミックス薄膜 窓ガラス。太陽光を浴びるだけで掃除の手間のかからないその曇りのな

いガラスには、竜代の後ろで背もたれを抱えるように反対に座っている私服のあずさの姿も映っていた。

「うん……そうだね」

たいして手がかりの掴めなかつた事に、がっかりしていた。『化け物』が出ると聞いて興奮していたテンションは竜代の返答で冷めきつてしまつていた。

「任務内容の確認だ言つてみろ。思い出せ」

元気のないあずさに、竜代は問う。あずさは竜代に見つめられ一瞬たじろいだが、すぐに気を取り直して。自分達がいたフィギュア・サークルで局長の言つていた、『任務内容』を思い出し答えていった。

管理局長室で。

局長は竜代とあずさの2人を前にし、スクリーンとなつた窓の面に表されたポイントを捉えながら説明していく。2人は一字一句逃さない聞き流さないよう真剣に耳に入れる。局長は言つていた。

「ここに野獣化生物の反応ポイントがある。君ら2名の任務は、ここの地球という星の住人として潜り込み、野獣を見つけ出して直ちに抹殺し。報告する事だ」

……

局長の言葉を思い出したあずさは、ポツリと言つた。

「バグ化した野獣を見つけ次第退治する事……」

「そうだ」

竜代は、さも当然のよつたな領きしか返さず、デスクの上の書類の中から一冊の黒表紙ファイルを取り。パラパラと挟まれていた紙をめくつていった。

「反応ポイントは、あの中等部 校舎。それは わかつてる。後は何処に いるのか。もしくは……『何が』バグ化したか、なんだ」

竜代の説明を真剣に聞いていた。

「知能を持つていると厄介だな。昼間は姿を変えているかもしない」

「……」

まだ、何にも身元が わかつていらない見えない『敵』……野獸。

あずさ達の住む所『フィギュア・サークル』から もたらされたもの。いつから そうなつてしまつたのかは わからない。何がきっかけで そうなつてしまつたのか。宇宙各地で、バグ化してしまつた奴らは確認されるようになつた。

幸いバグ化生物 特有に持つ信号というものが あり、その発見はすでに遂げているフィギュア・サークルの住民は最大限にそれを利用して、こうして あずさ達のような者達を現場へと派遣する。

あずさ達は地球人ではない。人間とも違う。構造が違う。仕組みが違う。根本が違う。

『数』『数字』が『情報』となりプログラミングされ、それ特有のセントラル プロセッシング ユニットを経て具体化され形を成す。具体化されなかつたもの。または歪み具体化されたもの。それが。その不幸な者達が。

野獸。

あずさ達の『えられた任務とは。反応が確認されたポイントの野獸を発見 次第、始末する事だった。

こうした任務は竜代に とっても あずさ達に とっても 初め

てと なる。

(知能……だつたら初任務で厄介な仕事だなあ……)  
あずさの心中に嫌な吐息が広がった。

それは、竜代の『過去』に大きく関わっている。

## 222 【バグ化生物誕生論 1 「回転キューブ】】

現在 提唱されているバグ化生物誕生の説は、幾つかある。俗説にしかすぎないが、紹介しよう。神のような子どもの話。

少年タイシの住んでいる家は貧乏だった。

お金がない。だけど親と弟妹がいた。

いつか災害が起きたら隣近所よりも真っ先に崩壊してしまいそうな屋根の傾いた家に住んでいた。何とか今は持ちこたえている。タイシはまだ子どもだった。小さい弟や妹がいるけれど、まだまだ自分一人でも遊びたい。そんな年頃を抱えていた。

ある日タイシは親に おもちゃ屋へ連れて行つてもう。ラジコン、飛行機、ミニカー、カード、人形、プラモ、テレビゲーム。それらには全くと言つていいほど興味を示さなかつた。

しかしたつた一つだけ。タイシの心を揺り動かした物がある。あまり目立たない隅のカウンターで、照明の光も届き当たらず影でひつそりと隠されているように陳列されていた、その物よ。それは。

回転キューブ。ルービックと、建築学者の名を付けられている。

一般的に浮かぶものだと。立方体が $3 \times 3$ 個 集まつて合計9個で一面を成し、それが各面に同じ色を向けて揃い、立方体と成る。各列、行で縦と横に回転させる事ができ、一度ぐちゃぐちゃに回転させておいたものを今度は色を揃え戻そうと思案していく。そんな思考遊びであるのだ。

実際に試してみるとわかる事だが、ただ回転させていくだけではなかなか色を揃えられそうにはないと思われる。

「コツがいる。そしてパターンを覚えればいいのだと、キュービス  
トは言った。

試してみるといい。

タイシの好奇心は、それ一点に向いていた。しかしながら新発売さ  
れて間もないそれは、おもちゃとしてはとても値段が高く、貧乏な  
身分と知っていたタイシは欲しいと親に言い出す事ができなかつた。  
子ども心に親達を気遣つている。長男で、下の弟や妹の事も考え  
る。仕方ないと言えよう。

いつたんは退却したタイシだったが、決して諦めてはいなかつた。  
何と、タイシは自分の手で回転キューブを作る。

材料は紙だ。安く手に入る厚紙だ。壊れやすいし水にも弱いが形  
になつた。ちゃんと回転し、おもちゃとして充分に遊べた。見事で  
ある。

ただ、前述に述べた普通の色並べのキューブではなかつた。各面  
に色を塗るのではなく、タイシは何と数字をかいたのだ。

色ではなく、数字を並べ戻すキューブ。1 2 3 4 5 6 7 8 9、1  
2 3 4 5 6 7 8 9、…… 1 2 3 4 5 6 7 8 9。一面に9つの数字を  
順にかいていた。そしてその同じ面が立方体の6面に。  
かき回した後は、元に戻す。

それだけの楽しみ。

タイシは、彼は遊ぶのだ。紙なら幾つでも作れるし、人に贈るわ  
けでもない。  
彼はお金をかけずに時間という手間をかけて欲しいものを手に入  
れた。

欲しいものとは、形。  
神なら、宇宙か。

忘れないでほしい。タイシは子どもだったのだ。  
コツをつかめず慣れないうちには、揃えられるわけがない。  
揃えられなければどうするのか。答えは単純だ。元に戻らなけれ

ば

ポイだ。

放棄する。

そうやって『生まれたものが。

……『野獸』である。

### 333 【 天才少年は 】

こんな論文、世間には発表せん！

私は恥をかかすつもりか！ 水島！

かつて竜代はフィギュア・サークルでも有権に値する大学で勉学と研究に明け暮れていた。

年が まだ若かった。格段に。

始めは天才少年や、神の申し子と。頭脳は もてはやされ、将来に期待されていた。

本人に とつては周囲の称賛など耳に入らない。少年だった彼はまだ、歪んでも いないし真っ直ぐ歩いているのがどうかも わからなかつた。

『数』『数字』って何だらう？ 何のために あるんだろう？ どうして体が『情報』で出来ているんだろう？……？

浮かんでは積まれ浮かんでは積まれていく疑問の数々が、山となり幼い竜代の頭の中に整理され しまわれていく。蓄積される箱の中の領域は有限だとしても、信じられないほどの広大さ だつたのかもしれない。

彼は大人へとなるに つれて ひとつずつ疑問を解き明かしていくことをするだけなのだ。

先は、わからない。

しかし。彼の そんな志を、周囲が いつも同じで見てくれるはずは なかつた。

彼は数々の論文を書く。

子どもが作文を書くような感覚で、決して笑えないような論文を書く。

それは、天動説が地動説へと移り変われるくらいの衝撃的な内容

だった。フィギュア・サークルの住人に とっては 。

『アグマリズムと知能解との交配』『切斷された電腦線と配信されるナンバー「数」について』『デバック感應システムと可能 制御』……

恐らくは地球の者に とっては なじみの ない事柄だが、フィギュア・サークルの者に とって それらは どれも斬新で衝撃的な ものだった。

比較的 温和だった竜代の通う大学内に、激しく旋風が巻き起こる。

竜代を見る目が変わる。

ある者は尊敬の眼差しを。ある者は狂喜の産声を。  
また ある者は……やつかみ を。

彼を危険と見なした数は、年月とともに増えていった。

上の意見に逆らうな！

おとなしく言つ事を聞いているんだ！

教授、権力者は竜代をおさえに かかる。  
出る杭は打たれる。

（皆が先生の『失敗』を望んでいるんだ……）

あずさは細かくは知らなくとも、だいたいの素性を知っていた。  
自信を持っている。自分が一番、竜代の近くに いて竜代の事をよく理解しているのだと。

今回の任務も、あずさは怪訝に受けとめていた。

何故、地球？

何故、遠くの星？

もし相手が知能を持つた『野獸』なら……こんな厄介な仕事が初

任務。

とても新人が なせる内容だつただろうか。

「先生！」

あずさはイスから飛びおりた。大げさに着地し、竜代の前で両腕をめいっぱいに広げて。

何も裏など ない、素直な笑顔を竜代にと捧げた。

「任務が成功したら、皆びっくりするかな！？」

屈託のなく明るい、竜代を感じきった顔。

竜代は微かに笑い……目を伏せた。

「成功したら……な」

閉じた目の裏の視界には、これまでに過ごした時の街並が思い浮かぶ。

フィギュア・サークル。『数』『数字』が支配する世界。星。

地球で過ごす2人には、遠くの物語の章にと置き忘れてきたい面持ちだつた。

「明日の夜……実戦だ、あづさ」

竜代の指令は、マンションから見下ろせる夜景へと向けられた。  
（成功させなくちゃ……）

あづさも、窓に映る自分と竜代と暗い空に向かつて決意を固めた。

……

1。

『探索』

ナンバーサーチ。

2の。

『情報 開示』 ナンバー・ディスプレイ。

3だ！

『攻撃』 ラン。

いいか、『基礎』を忘れるな

竜代の“教え”的声は何度でも繰り返される。1、2の3。  
それはリズムにのって。  
それはリズムにのつて。  
難しい事ではない。リズムにのるだけだ。  
バグ化された野獣は、朽ちて滅びゆく。

(何処にいるの？……『野獣』！)

放課後の学校の教室で。あずさは『友達』に呼び止められた。  
昨日とは柄や形の違うピン止めをしている外ハネ髪の女子と、色  
黒肌のロン毛の女子。今日は2人だけだった。昨日、『尊』を提供  
してくれたショートヘアの女子はいないらしい。

「加藤さん」

席で帰り支度をしていたあずさは「ふえ？」と間の抜けた声で  
返事をしてしまった。

まだ生活には慣れていないらしい。

「ななな何でしょ？」

動搖は、そのままに。しかし特に気にはされなかつた。

「昨日の放課後、水島先生と何を話してたの？」

いきなりの質問。あずさはますます心臓が飛び出しそうなほど

動搖した。

「そのまま2人で帰つたつて目撃の噂が あるんだけど?」

核心を突く。その通りだつた。

あずさと竜代は別々に地球へ赴き、別々な所に住居を構えて住む事に している。しかし新入生と新任の教師。同じ日に2人は生活を開始した。そして。

昨夜は竜代が拠点と するマンションに訪れ、2人に課せられた『任務』に ついて今後の策を練る手はずだつたのだ。  
あまり具体的な策は打てずに終わつた あずさは結局 帰つてしまつたのだが。

そんな事を露とも知らない女子2人は、勝手な想像を展開した。

「まさか……」

「教師と生徒の……」

次の声は合わさつた。

「禁断の……」

あずさはブツ！ と吹き出し慌てた。「ち、違う…」

完璧に否定しながら心の中では なりたいけど、と呟いた。  
禁斷の。

敢えて その先は謎のまま。

背景 効果の薔薇が うつとうしい。

「それは、そのう……」

あずさは必死に言い訳を考えた。本日、帰宅してから再び学校へは戻つて来る事になつてゐる。竜代との待ち合わせだ。

勿論、正体は明かせない。自分は野獸を倒しに来た宇宙人だとは。どうにか やり過ごす方法は ないだろうかと。

あずさは開き直る。

(ええい、適當だ！)

腹を決め、手先を組みながら物凄いスマイルを作つてみせた。みせてみた。

「先生とは、 親戚なの！」

笑顔のままに。

「母の従兄弟の伯父の嫁の隣の太郎の息子が花子なの！　じゃ、  
急ぐから！」

と、あずさは言い捨てて駆け去つて行つた。片腕をしなやかにクネ  
クネさせながら風にそよぐように。

呆然とするしかない友人2人を差しあいて、友人達は繰り返す。  
「母の従兄弟の伯父の嫁の隣の太郎の息子が花子……」

つまりはオカマ。適當である。

「変わつた事つて　あの子よねえ……転校生」「  
手がスネイクになつてたしね……変な子」

どうやら適當のさじ加減を間違えたあずさは、しつかりと『  
変人』の称号を手に入れた。

そんな訝しげな友人2人の背後から、竜代がやつて来る。

「加藤あずさは帰つたか」

ちょうどよいタイミングで姿を見せたとあつて、「水島先生  
！」と友人達は歓喜の声をあげ盛り上がつた。

「加藤さんと親戚つて本当なんですか？」

「本人がそう言つてたんですけど！」

「教えて下さい！　そうなんですか！？」

今や竜代は全校女子達の関心の的でもあつたのだ。答えない  
わけにもいかず。

竜代は苦笑いをしながら「まあ……そうだね」と話を合わせるし  
かなかつた。断じてオカマではないが、親戚、といつ事で落ち着  
きしきである。

そんな大人の余裕を見せた竜代だったのだが、フ、と田の光を変  
えた。

「で、君らに頼みがあるんだけど……時間、空いてるかな？」  
口元は笑つたまま。しかし目は笑つていない。

これから夜が来る。

あずさが再び学校へと戻つて来るはすだつた。

将棋、囲碁、チヨス、オセロ。

誰でも知っている、8または9マスボード上で競うゲームを取り上げてみた。

そういえば野球は9回 表裏、9人対9人でするスポーツだったか。まだ探せばあるかもしない8か9を基盤とする一般ゲーム。柔軟な思考と緻密な戦略を要するボードゲーム。たかがゲームにしか過ぎない。血は流れない。ないはずだ。

そしてバグ化生物の誕生の説話は、こんな所から生まれたかもしれない。

⋮

まだ幼いあずさは難民キャンプ地にいた。争いの絶えない情勢の渦中にいた。

何故 爭う。何故 奪う。何故は繰り返される無限のループ、反復子もしくはイテレータ。

何処の世界でも支配は されてしまうのか。

全天の星。辺りの砂漠と、遠く地平線にまで途切れなく、そして果てしなく広がる四方八方の荒野。砂漠には、街並のように通りをつくり張られている睡眠と休憩用のテント。施設と言えば洗濯場などの衛生施設、給水タンクなどの浄水施設が国によつて用意はされていた。

ラテン語で“星の見える所”という意味を持ち生まれたプラネタリウム。あざさのいる場所は星の観測にはまさに打つて付けの見晴らしの良すぎる環境で、邪魔するものは何もなかつた。

ここでは天動説が唱えられている。自分の星がほぼ中心に空の星は動いているのだと。

この星の住人が宇宙の何処までを把握し開発に努めてきたのかはまだ幼い あずさは知らないが、ここでは天の方が動くのだと解釈されているらしい。

地球人は自分達の星の方が動くと地動説を主流にした。天動説はもう古きものだと。

星が変われば、どちらが正しいという事ではない。星はそもそも、止まる事はないのだから。

「あの目立つて輝いているのは何?」

あずさは給水場で、大人と一緒に水を補給しに来ていた。大人がタンクに水を注水している間、手持ちふさたになつた あずさの関心は空へと向く。指のさす方角には あずさの言う通り少しばかり青く見えて光り輝く一個の星が存在していた。小さいけれど、輝きが他に比べていつそう強い。

「チキュウ」

大人は答えてあげた。どうでもいいよ。

「チキュウ?」

「地球よ」

タンクの水が溢れる手前で蛇口を捻り、水を止めた。

「あるのは知ってるわ 遠い星。私達と似ている人間という種族が住んでいるけれど」

もつたいたぶつたように言い、タンクの蓋は閉められた。こぼれなりように。

「けれど?」

「興味がない」

作業の手は止める事はなく。もう一つの持ってきていたタンクに今度は水を入れていく。

「何故?」

あずさは疑問を口にした。大人は、やはり答えてはあげても休ま

ない。

「私達には無いものを彼らは持つていて。とても邪魔」  
あずさは首を傾げる。「邪魔？ それは何？」

水は、注ぎ込まれる。

「 感情」

人の場合。人の脳には本能・思考・感情と3つのセンターがあるとされている。

同じく脳には、主張・遂行・護身と。この脳内の3×3の連携、もしくは伝達の結果が人の質となり表に出されよう。  
ファイギュア・サークルでは、『感情』は無、それから後手にまわる。大きく強く、これまで制御されてきただけなのかもしれない。

あずさのいた難民キャンプ地は、その後。予告もなく攻め込まれ、壊滅させられたといふ。

一掃された跡地には、外来を呼ぶためのバー、闘技場、カジノなどの娯楽場を建設するつもりである。

決定は実行。0なのか1なのか。イエスかノーか。攻めなのか受けなのか。プラスかマイナスか白なのか黒なのか。

それはダイスでも振るように決めなければいけない。出目を実行せよと無情にも。

彼らには感情がない。

彼らには感情がない。

誰かが盤上の高みから見下ろして、遊んでいる。

あずさ達という駒を……動かしている。

「 ……」

感情がなければ、何も感じる事はない。悲しむ必要もない。

だが。あずさは『第3の道』を知っていた。

「あ、あ、あ……」

あずさは もう来た道を戻れそうではないほどの長い道のりを、  
子どもの足で疾走してきた。

「……」

荒野と砂漠を駆けて來た。捕まるのか捕まらないのか、追つてくるのか来ないのか？

後ろには誰もいのが幸いだつた。

『第3の道』……それは、『逃げ』る事。

「チキュウ……」

上を見上げると、相変わらず天はその懷に星々の所有を示してい  
る。

夜空の星は、あずさに何を導こうか。

消える？ 消えない？ ……逃げる？

あずさは隙を見て走り、逃げ出す事には成功した。あずさの中に恐らくは、通常にはないものとして捉えられていたものが存在していると思われる。そう。

『感情』の因子。

あずさは盤上の者に『消された』のでも『消されなかつた』のでもない。

あずさが自らの『意志』で逃げ出した事を。

逃げ出した者は、先 隠れなければならぬ。『決定』から外れた者よ。

『野獸』と呼ばれて。

神は1から9の数字を組み合わせて遊ぶ。並べて遊ぶ。並べて遊ぶ。

1と9。1と9と3。2と9と3。2と8と4と6。6と9と3  
と4と2と……。

重複してもいい。6と6と3と2。

その組み合わせは、？通り。

……

私立チユートリアル学院。児童の他に、障害者、高齢者の福祉・  
養護施設が付設されている近代的学舎である。生徒が主に利用する、  
専攻科目ごとにおかれた研究室などの教室が密集する校舎の中の一  
室で。

白衣を着た竜代は敵と対峙していた。

相手は、美術室に飾られていた絵画。原色を多用している強烈な  
色彩タッチのその絵は、面白い事に20世紀初頭のフォーヴィズム  
(野獣派)を思い起こさせている。

「姿を現せ」

竜代の低く重い声が敵を呼んだ。敵、絵画がそれと竜代は決めつ  
けている。

『野獣』自身から特有の信号が出されている事を踏まえ足がかりに  
して。潜伏している場所を特定する事など、とても容易い事だった  
のだ。

そして竜代は一人で、敵の前へと出向きて面していた。

『……』

絵画は話さない。しかし。

「『』のまま、お前自身のプログラムを破壊してやろうか……それもいいが、せっかくなんで正体の一つでも晒してみたらどうなんだ」  
何故か敵を煽る竜代。すると敵は、空間をねじ曲げて絵画からジ  
エル状のものとなって飛び出してきた。アクリルの絵の具が融け出  
してきたかに思える。ガソリンでも撒き散らしたかのような光めく  
グラデーションな色彩をしていて、鮮やかではあるが不快な色だと  
人は眉をひそめるかもしれない。

「構造のプログラミング次第で、姿形は自由に変えられる。だがそ  
れができるのは、ソースコードの一つでも理解可能な技術者だけだ」  
ジエル状の敵は床の上を蠢いている。時々、触手を真似て手を伸  
ばしている……手なのかそれはと疑いたくなるけれど。

「バグ化には関係のない事か」

苦しんでいるのか助けを求めているのか。敵は這いながら、竜代  
に近づこうとしているようだ。きっとそれは本能。バグ化はしたが、  
生きようという意志はある。

「教えてやろうか、フィギュア・サークル世界においてのプログラ  
ミング基本概念」

相手を見下すつもりはないが、そもそも見えてしまった竜代の冷めた  
視線が敵を貫き冷凍へ固体へと凝固させてしまいそうだった。

「1、自己が何なのかを明かさねばならない『証明』。2、言われ  
た事は必ず実行し やり遂げねばならない『義務遂行』。3、自己  
を守らねばならない『護身』。この3つだ。ロボット工学や家電製  
品の3原則と混同しないように。似てはいるが、お前はロボットで  
も機械でもない、基盤プログラミングから逸れた者」

わかったか？ というような顔で敵を見つめた。

「これより上の第0条があるが。 各個体の先よりも全体未来を  
優先せよ……『種の存続』だ。覚えとけ」

竜代は白衣のポケットから『探索爆弾』を一つ取り出した。

そして、敵の頭上に放り投げる。ボン！ と教室内だけの程度に  
爆発音は広がった。白い煙が敵を中心に発生し、細かいゴミなどを

巻き上げる。しばらくして治まつた後に姿を再び現した敵の一部分には、『5』という黄色いゴシック体の数字が浮かび出していた。

「5リズム、か……傍観、観察者、の数字だな。なるほど、絵だからか？ 生徒を見ていて楽しめたか？」

話し返す事の不可能な相手に竜代は、一方的ともとれるような会話をしていた。ひとり言は続いていきそうだった。

もしや やつと語れる相手を見つけた喜びが口を軽くしているのだろうか。楽しみ、喜び。それは単にほほ動かないはずの感情から来るものなのか別の本能から送られてくる言葉や行動にしかすぎないのか……不明だが、とりあえず わかつている事は。

竜代はこの部屋に来てから、一度も顔を崩してはいないという事だった。

「感情か……」

竜代は探索爆弾が入っているのとは違う、白衣の胸元についているポケットに手を当てた。少し固形に膨らんでいた。『何か』が入っているらしい。

『……』

ぐたり、と。壁に寄りかかって『立つ』フリをするジユル状の敵。赤子のようだ。弱々しくもあり、強くなろうという本能部分を垣間見ているようでもある。

竜代の頭の中には、別の思考が渦巻いていた。

『5』回 急所を叩けば敵は滅びる。はずなのだ。

竜代の思考は、『決定』される。

「試させてもらうか……新薬」

気につけていた胸ポケットから、彼の言う『新薬』というものを取り出した。それは手で握れるサイズの小瓶に入った透明の液体。貼られているラベルには、“感情”を意味する言語が書かれている。「地球上にあつて俺らには欠けるもの……加えると、どうなるか」初めて竜代は口元を歪ませる。

小瓶の蓋は捻り空けられ、中の液体は敵へと振りかけられた。『

ギシャアアアアッ！』

金物でも搔いたような悲鳴をあげた。

敵は慣れ、慣れ、慣れ。触手を、体を、狂い踊らせた。シユウウと、ガスが発生しゴムの臭いが屋内に充満していく。竜代は手の甲で鼻のあたりを庇い、目を細めた。一步、一步と後ろへ自然に足は下がる。

何かが、敵の内部で起こっている……竜代は目が離せなかつた。好奇心の心は、感情か？ 本能か？

やがて敵は、ぐぐもつた音を発していく。『リュウ……ダイ……』名前を呼ばれ、竜代は焦りの表情を見せた。

「何故名前を知つていた？」

疑問をそのまま口にする。『フ……ハ……ハ……』敵は笑う。

目の前の結果に、竜代は驚きを隠せない。身の危険さえ本能的に感じていた。

『今マ、テ見テ来タモノヲ言葉一シタダケダ……生徒ノ名前モ……言エルゾ……』

最初に聞き取りにくかつた発音は、徐々に流暢さを増していく。言葉が正確に発音される。たつた数分の間の事だつたが、この極端な変わりように竜代は舌打ちをせずにはいられない。

バグ化生物は進化を遂げた。進化と言い切れるのかは定かではない。

『知性ヲクレテ、感謝、スル』

それが合図だった。

グバツ！

自由自在に伸び縮みできる体を思う存分にと広大に。竜代をすっぽり包み込もうと始め反動をつけ背を天井近くにまで高く伸び出してきて。竜代に襲いかかってきた。『グルル……』

敵の唸り声。竜代は抵抗できず、くるまれてしまつた。

「……」

竜代は捕まる。巨大ジェリーフィッシュにでも絡められているに

似ていた。

“感情”を備えた『野獣』は、解き放たれ……

た。

ひとつ。自己同一性、アイデンティティ。自分が何なのか、または何をすべきかを主張しなければならない『証明』。ロボットならロボット、機械なら機械だと。表してみよ。

ふたつ。言われた事は必ず やり遂げねばならない『義務遂行』。ロボットなら服従、機械なら操作性。命令には従え。みつつ。自己を守る 耐久、『護身』。

人がいた。人の話。世界を造ろうとした、人の話だ。

人は、まず理想を掲げた。まずは起だ。世界はきっと、こうあるべきだと。完全なる世界を頭に描き、創りたいと願う。

次に人は人を助ける。理想だけを唱えていたのではなくならない。ひとりではできない。協力しなければ。手を貸さねば。ひとりでできなければふたりで。ふたりなら、きっとできると。

そうして結果が出た。形となつてまずできた。見て見てほら、上手くできたよ成功だ、と人は達成感に酔いしれる。

上手くいったら自信がついた。もっと見て褒めてほしい。褒めて褒めて、もつと自分を褒めて認めてほしい。自分は自分、自分しかいないのだと。

さあ自分の事はもういいか。周りを見て。周りの人は、何を思っているのだろう? と思ふにふける。

周りの人の懷に飛び込んでみる。そして周りに歩調を合わせて進んでみる。世界を皆で創りたいんだと息巻いた。

何て楽しいんだろう、懷の中は。こんなにも楽しいものだつたなんてと気がついた。それではこの湧き上がつてくる喜びと楽しさをどうか周りにも分け与える事ができないかと考える。分け与える。

力が みなぎり、さあ今なら。世界を、今なら大きなものができるだろうと確信する。やつてみようとやる気を出せる。

そうしてできた世界は完全。これが世界だ。自分は強いし、何でもわかる。だつて今までに ほら。自分の中で血となり肉となり、培ってきたものがあるのだから……と。

1から9までの性質。生きている あなたは今、どのあたりにいるのだろうか。

理想、支援、成功、個性、観察、調和、喜び、挑戦、平和へ。見てそしてまた理想へ。

円を描いてみてほしい。リング。永遠の象徴。生から死、死から生へ。

円周上にとられた9つの点は、線で結ばれる。崩れる事はない、バランスはすでにとられている。そしてその『9つの図』は名前をつけられ、とても人の役に立とうとしていた。

本能・感情・思考。  
そこに証明・遂行・護身。

これに興奮・活動力・安心を促す3つの神経伝達物質の量を調節し加えて出たものが。

性格である。

すでに科学で証明された。

科学も人も、完全を求めて旅に出る。

水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、今は外れて力なき冥王星。

この太陽からの9つの星を結んだ図を神は何処からか見下ろして

遊  
ぶ。

この調和の宇宙を。銀河を。星を。創りあげたものを。  
だが輪を乱すものを、神は認めない。決して認めない。認めない。

さあ輪から外れた『野獸』よ。何処へ行く？

ある天才はその頭脳もつを以てして彼らの『再生』に臨んだ。夢を描  
いていた。

ただ周囲には、『理解』されていない。

あずさは一度帰つてから再び学校へと戻るつもりだった。

公道を走つてきたソーラーバスから降りた あずさは、「えと……」と、次に行く道に迷つ。確か電車に乗るはずだったのだが、地球に来て間もないあずさは帰りの駅への方向や道をまだ把握できていなかつた。仕方がない、近くで見つけた無料ネットカフェに入る。無料ネットカフェでは、レジにて飲食などを設定料金以上に注文さえすれば、2時間までネット利用が無料となつていい、そんなシステムの店である。

あずさはオレンジ色のジュースを注文して受け取ると、店の外壁となつている窓ガラスに面したカウンター席に座つて、設置されたいたパソコンの電源を入れた。

ナビを開き、自分の現在位置を確認して目的地を確かめる。「ふんふん」「

ついでにネット料理アニメ『クッキング・ファザー』を観賞した後、店を出た。

駅へと向かう。触れても実体のない街路樹が間隔を空けて並んでいる人通りの多い遊歩道を歩き出していた。すると深緑公園が見えてくる。

ここには広葉樹、イチョウなどの針葉樹、桜などの落葉樹と、本物の樹が多種に植えられており見る者を楽しませてくれる大規模な国営自然公園だつた。あずさは都市にしては珍しい風景に惹かれて公園の中へとドキドキしながら飛び込んでいった。

空氣も色鮮やかさも全然違う世界に、あずさは興奮して何かを叫んでみたくなる。ここ地球に来て初めての爽快感にとても感動していた。並木道を歩いて、時々に地面の上を駆けて来る足元の枯れ葉や風が気持ちよかつた。

古風な男女のカップルや、犬の散歩をしている老人とすれ違い、ベンチで本を読んでいる大学生や昼寝しているおじさんの横を通りすぎていった。

道をそろそろ突き当たるかと思い始めた頃。あずさの耳に、動物の鳴き声が入ってきた。

最初気のせいかと思ったが、あずさは確かめてみようと脇道に入る。大通りから外れて、小さな道を辿って行くと途中で小さな『箱』を見つけた。

繁みの横に ちよこんと置かれていた、『ERJAS』と側面に書かれている蓋付きのダンボールの箱。蓋は閉まつてはおらず、覗くと一匹の白い子猫が可愛らしくあずさを見上げていた。

どうやら捨て猫らしいその所帯を、あずさは悲しく思つた。

「……」

動物を飼うには申請がいる。そう あずさは知識として聞いていた。本当なら、動物を無断で捨ててしまふ行為を行つた者には それなりの制裁が待つてゐるのだが。

「ミイ」

子猫は鳴いていた。鳴かれても、とあずさは困つた。立つたまま、どうしようか周囲を見渡してみる。すぐそばには弁当箱や新聞紙が捨ててある網目で大きいゴミ箱があるだけだった。

考えていたら、急に小雨がパラついてきた。本格的に降り出す前に立ち去らなければと焦りが生じる。あずさは去る事を決意し、ため息をついた。

せめて、と。あずさは箱の蓋をきちんと閉めてあげた。濡れないようにという配慮からだった。

静かに、あずさは晴れない気持ちで場から去る。雨は強さを増してきていた。

磁気浮上式リニアモーターカーに乗り都心から離れて数十キロ。地下マンションにあずさは拠点を置いて住んでいる。地下には地下

で、交通・業務・供給・防災などの民間施設や廃棄物処理・研究・軍事などの国営施設が都市を中心に建設管理されている。

大深度法はより複雑に細かく定められ、やがてはマンションや場所によつてはテーマパークも造られるようになつてゐた。今度ウツソジヤパンというレジャー施設では科学推進派による『シユーレインガーチ音頭祭』が開かれる予定である。

あずさは指紋・声紋・視紋・鼻紋・口紋・耳紋その他 秘密の紋の照合を瞬時にされてマンションの玄関から入り部屋へ帰ると、ぐつたりとして多人数掛けのソファに寝そべつた。まだ慣れない生活には、どうしても疲れがつきまとう。

部屋に入った途端に自動で点いた照明器具、同じく自動で映りだされたインターネットテレビ。照明は天井全体が太陽光発電によつて調節された明るさで照らされており、テレビは立体映像となつて専門チャンネルが自由に選べる。昔にデジタル放送統一化された後にインターネットは世界基準レベルですでに法制化されていた。地下なので日光は届かず、窓が空気清浄型なのには土埃などが入りこまないようにするためである。

「お腹すいたなあ……」

一人暮らしのあずさには、ご飯を作ってくれる人はいない。いるわけがない。

自分で作つてもいいのだが、疲れて面倒だったあずさはテレビを見て「これにしよ」と呟く。

ちょうどテレビではCMを放送していた。

10分後。ピンポーン、と。玄関から元気のいい声が聞こえた。

「ちわー。『オンライン・キー・フライ・ドキッキン』でーす

軽いノリでの挨拶だつた。

「どうもー。支払いはどうでしたつけ?」

「あ、スカイレインボーカード払いですよー、つて常識でしょ知らないのアンタ」

と、お互いの会話は玄関のインターホン越しでなされていた。直接に会う事はなく、玄関に設置されたショートボックスに入れられて商品は部屋の中へと滑り流れるように運ばれてくる事になっている。勿論、運ばれてくる途中で危険物ではないかと識別され。

「あいにく、世間知らずなんです。ごめんなさい」

あずさは「ごまかそうと謝った。見えないが口がどうやら悪そ  
うなオンラインキーのお兄さんは、ついでのようになつてあげた。

「月末に請求来ますんでねー。それまでにしつかりと銀行に預金し  
といて下さいねー。3ヶ月滞納すると死刑になりますんで。赤字の  
警告封書が来ないようにお気をつけてー」

カードに描かれた空に架かる7色の橋は、交通費・食費・光熱費・  
ガス代・電気代・治療費・通信費を表しているらしい。それぞれは  
このカードで支払われる。

「じゃ、また。毎度ー」

用が済んでお兄さんは足早に立ち去つて行つた。

あずさは丸型シーフードピザを8分の1ずつに切り分けて食べながら、テレビドラマを観ていた。生き別れた片親と再会する、兄弟達の感動的なドラマだった。中学生の頃に別れを宣言され路頭に迷つた兄弟達が数々の苦難を乗り越える。公園に作り住んでいた段ボールの家はその努力のかいあつてか発展して3階建てになつた。親も見つかり、兄弟達は幸せへの階段へと上つていくのである。

あずさの脳裏に、帰つてくるまでに出会つた、箱の子猫の姿が浮かんだ。雨は地上に降り続いているのだろうか。お腹をすかせているのだろうか。鳴いているのだろうか。それとも……と。

ぼうつと、痺れた感覚の疲れた頭の中で。あずさは思つた事を口にしてみて……ドサリと横になつた。

「感情つて、何……？」

……答えなど期待せず、まだテーブルの上に残つている冷めかけのピザを見つめて。

ソファのふかふかな柔らかい感触に心地よさを感じながら、あず  
さはひとりゆっくりと目を閉じて……眠る。

テレビでは最後に登場人物達が楽しく幸せのメロディを歌つて…  
いた。

……

あずさは目を覚ました後に慌てて飛び起きて、学校に向かう事に  
なる。

とても途中に子猫の様子など見に行く余裕はなく。学校へと直行  
して行く羽目になった。

だが、それでよかつたのかもしれない。何故ならばだ。

雨に濡れて色を濃く変えた、蓋をされて中には子猫が入っている  
はずの箱。

箱は原形を変えず、移動もせずに そのままだった。  
しかし。

地面の小さな窪みに流れ注がれていく赤い液体。一本の細い道を  
作るようじに、雨にも流され流されていく赤い色。  
箱から、溶け出すよつて。

雨は、降り続いている。

あずさは時間を気にしながら、何とか待ち合わせ時刻、ギリギリに学校へと戻つて来た。

断熱材としても使用されている、Hコにも優しい天然纖維の羊毛を下地に織られた、生成色の上下の合わせを着ていた。上下どちらにもポケットが幾つか付いており、『探索爆弾』などの様々なアイテムが収納されていて、手荷物は特に何も持つてはいなかつた。

走る足は休む事はなく、竜代と待ち合わせている理科室へと向かっていた。明かりの点いている校内は中夜に近しと言えどもまだ電気などの供給を自動ストップさせてはいないらしい。おかげで あずさは迷う事はなく、昼間に記憶していた通りのルートで目的地へ辿り着く事ができたのだった。

あずさは理科室に入る。しかし絶対に先にいると思い込んでいた竜代の姿は何処にも見当たらなかつた。

「あれえ……？」

と、寝ぼけたような声を出す。狐にもつままれたような顔をしていた。「おかしいなあ」

竜代は時間に正確なはずだつた。あずさは首を傾げる。そして「ああ！ そうか！」と頭を抱えてパニックになつた。

「もしかして場所を間違えたのかも！」

自分でも充分に有り得ると思つてしまつた。うおおおお～と叫び声を上げる。すると。

「合つてるよ」

と、あずさの背後から声が聞こえた。

「……」

「い」苦労さん」

振り返ると、腕を組み入り口付近に体をもたれかけてあずさを見

ている竜代がいた。

「せ、先生！ なんだ、いたんじゃないですかあ」  
びっくりして竜代の前まで近寄った。あははと少し誤魔化し笑いをしながら竜代の顔を見上げている。竜代は何かを考えながらブツブツとひとり言を言い出した。

「捜してんだが……」「？」

「考え方を変えてみようと思つ」

意味がわからない事を言い出した。あずさの頭上にクエスチョンマークが浮かぶ。

「どういう事でしよう？ 先生」

と、聞かずにはいられずに聞いてみたあずさ。「例えば」「チラ、と竜代があずさを見る。視線、表情それはとても意味深な仕草だった。片腕の上にのせ立てたもう片腕の先の人差し指を。当っていた口元から離して、ゆっくりと、その指は。

……あずさの、口元に。

(へ?)

手は広げてあずさの首筋にかかり、頬に。

(はい?)

やがて竜代の両手が、あずさの顔を包み込むように、優しく自分の顔へと近づけていった。

いくら鈍いあずさといえども、これにはたまらず。最速で顔が真っ赤になつた。だがしかしあずさは拒否ができない。「……！」

そのまま竜代の瞳の中へと吸い込まれていった。  
しかし。

「い、い、加、減、に、しゃがれいつ！」

バコチーンツ！

鈍く嫌な音がした。頭蓋骨でも真正面からぶつかり合つたような

音。

その通り。頭と頭がぶつかつたのである。

バタリ。相手……あずさに近づいて迫っていた竜代は、思いがけない頭突きの攻撃にあって廊下の窓際に打ちつけられるほど飛んでいった。額からは煙が細く上がっている。

「……」

あずさはクタリと腰を床に落とし、正面で倒れている竜代を見た。自分は何もしていない。一体何が起こったのだろう、と。目が点になり始め何も理解ができなかつた。

「あーくそ。敵の策にはまつちました。厄介な敵だな、どーしてくれよう？」

あずさの頭上で声がした。

聞き覚えのある声。聞き間違えるはずのない声だつた。

あずさは、眼球だけを動かして真上を見てみた。すると。

「せ……？」

名前を呼ぶのに躊躇つた。ためらひ 無理もない。

その姿は人の形ではなかつた。何と、餅が伸びたか、もしくは魂となつて頭から抜け出したかのような姿形をしていた……竜代。天井近くまで伸びていた餅か魂の先に丸い、幼児にも見える竜代の可愛い頭がついていた。――サイズ竜代、略して――竜代としておこう。

どうやら――竜代の尻尾(?)の先は、あずさの前髪に繋がつているようだつた。

「せ、先生。何故……」

まだ半信半疑で頭上を見上げていた。受け入れるのに非常に時間がかかるらしい。

「何故……私の前髪に……」

やつと疑問が言えたと思っていたら、今度は前方。上半身だけを起こしてあずさ達を見ている、人の形をした方の竜代から声が返ってきた。

「そこにいたのか水島竜代。校内中を捜しても見つからないはずだな」

そう曰の前の竜代は言った。

(???)

さつぱり経緯いきわざがわかつていないあずさを置いて、竜代対ミニ一竜代

の会話は続く。

「捕まえたと思つたらアッサリと抜け出して。ずっと教え子の近くで俺を見張つてたのか」

人型の竜代が言う。これまでの会話の内容から察するに、どうやら本物はミニ一竜代の方である事が判明した。あずさは頭の中を整理する。「捕まつた……？」先生が？

全く知らない。恐らく『敵』である人型の言つ事に少しショックを受けるあずさ。

要するに自分の知らない所で、本物の竜代は敵と一度対面し。竜代は敵に捕まつて、だが抜け出して。そしていつの間にか自分の所に。

そういう事だった。

丸い顔のミニ一竜代は、激しく敵を睨んでいる。

「……そうだ。お前が俺の姿で堂々としてるもんではばらく様子を見ようと思つてな……知性のあるバグ化生物なだけに厄介な奴だ。一体何を企んでいる！？」

真に迫つて聞いた。敵は答えた。

「別に。面白かったんで」  
涼しく余裕だった。

「おおい！」

ミニ一竜代は吐き気を催した。

「先生い……」

あずさの冷や汗が止まらない。

そんな茶番が繰り広げられている合間に、敵は静かに変化しつつあつた。まずは長い髪。風もないのにザワザワとなびき出していた。

「……悪いのはそつちだぜ、水島竜代」

敵の黒い瞳の奥に光るものがあった。涙ではない、それは。

「最初に俺と戦った時に」

思い出されるは竜代が敵にぶつけた瓶の中の液体。

“感情”を意味する言語のラベルが貼られていた、瓶の中身。

「俺に、変な薬品をぶつけやがった。そのせいで俺は」

何か全く違うものへと、『生まれ』変わってしまったのだろうか。だとしたらそれは、敵にどつては幸なのか不幸なのか。わからない。

「悪いな……」

ミニ竜代の表情は影を落とした。冷ややかに相手を見据えるしかなかつた。

敵は、内部から風を起こして立ち上がり、変貌していく。

シユワワア……

炭酸が湧き出たような音とともに髪を含む体毛という体毛が全て立ち上がり、敵の竜代の顔は人でも何でもなくなつていった。もはや衣服を着た中身は、化け物そのもの。深い皺が刻まれた皮膚は今にもそこから血が出そうで気持ちが悪かつた。

えくぼを作つて笑つている。

愉快で面白そうに、笑つている。

「バグつた奴を元の形に戻す試薬だつたんだが……どうやら上手くいかなかつたみたいだな」

ミニ竜代は目を閉じた。

「16ME4U=10-910-9××

アルゴリズムを唱える。すると額から眩い光が輝き始めて、ミニ

竜代はその姿形を見るみるうちにえていつた。変えて、というより戻つた、という方が正しいのだろう。あずさの前髪と繋がつていたものは断ち切られ、元の人の形である竜代になつた。

「先……」

「悪いなあずさ。先走って……お前を信用してなかつたわけじゃないんだ」

あずさの隣に並ぶ。あずさの方を見よつとはせず、目の前の敵だけを難しい形相で見ていた。簡単にこれまでの事情を説明する。

「先に下調べしてた最中に奴とバッタリ遭遇して、まんまとしてやられた。こつからは第2Rとなる。<sup>ラウンド</sup> 基礎はOKだな？」

ざつと急ぎ足で話し終えて、あずさに同意を求めた。あずさは…。

「……」

少し考えて間が空いた。だが。

「はい！」

快く返事をした。

あずさは、敵と竜代の間に何があつたのかを全く知らない。しかしあずさは竜代を疑つたりなど微塵にも思わなかつた。

心の底から竜代の言葉を信じている。それだけだつた。

あずさと竜代は戦闘態勢に入った。廊下に出て、間合いを数メートルとつた。敵は粗悪に形成された細胞の体で、骨ばつた指からは黒く変色した、鋭く細長い爪が生えている。大きい口はこめかみにまで裂けて、耳は尖り、歯は黄色。臓器から湯気が立つているようにも見える。

本人は、何にも動じてはいない。なるようになればと、堂々としていた。

何処からかメキメキと木が裂け割れたに近い音が聞こえてくる。

「いいかあずさ……細かく指示を出す暇はない」

あずさの隣でボソボソと竜代は話す。あずさはしつかりと聞いている。

竜代は続けた。

「お互いがお互いのサポートを……しろ」

あずさはコクン、と頷いた。息を呑む。

「最初は奴の急所探しだ。<sup>サーキット</sup> 探索爆弾<sup>ボム</sup>は、幾つ持つている？」

竜代の問いかけには正確に。「『6個です』

焦りと緊張に押されながら。敵からは2人とも田を離さずに。

「『オ・バー・ド』作戦だ、行くぞ！」

それが合図。

あずさの足は地面を蹴った。「はい！」

敵に目掛けてまっしぐら。あずさのスタートダッシュを受け止めようと、敵は待ち構えていた。しかし。

ピヨイ。

あずさの体は転回するように、宙に浮く。手を何処にもつかずに体の軸を使って後方2回宙返り1回ひねり（月面宙返り）「ムーンサルト」）とまではいかないが、匹敵するほど鮮やかさで高く敵の頭上を越えてジャンプした。

「！？」

敵の視界からすれば、突然あずさは消えたように見える。

あずさは消えたが、代わりに視界の中に映つたものは。

『探索爆弾』<sup>サーチ・ボム</sup>を右手で包みかけて持ち、相手に手の平は広げているように構えてそれで左手で右腕を支えている態勢をとつた、竜代だつた。

「『探索……破碎』<sup>クラッシャー</sup>！」

ドオンンッ！ 従来の使い方とは異なつた『探索爆弾』<sup>サーチ・ボム</sup>は、竜代ならではのプログラミング・アレンジで、結果。遠距離から猛威となつて拡散エネルギーが放たれた。オオオ……。残響がおとなしくなつていいく。

直撃は避けられなかつた。猛威、とは言つたが破壊力の大まかを敵の体で受けており、周囲の破壊規模は比べて小さく。壁や器物などはあまり損壊されてはいなかつた。

敵はかなりのスピードで吹っ飛んでいつた。

一方、先に着地していたあずさ。少し離れた地点に敵は飛んで落ちてきて、廊下の硬い地面に沈む。「……さすが……」

タラリ、と汗が出るあずさ。竜巻アタックなバレー・ボールでも受

けたように凹んでいる敵の腹。そのダメージはやはり見た目通りに攻撃が強力だつたせいか、敵は全然動かなかつた。

「さすが先生……『オ・バード（おとり）』作戦、成功！」

そんな事を言つてみる。「はは……」

（怖いよおお）……先生の『探索爆弾』、強化版！）

改めて師匠の恐ろしさを知る。しかしそんな悠長な態度でいる場合ではなかつた。

「あずさ、攻撃だ！ 叩け！」

「え！？」

竜代の叫びがやつて来る。あずさは四つん這いになつたまま慌てて敵を見た。

敵 野獣の仰向けになつた体。額に、くつきりと『5』の数字が表れている。

（いけない！）

「はい！」

5回、急所を叩け。

あずさはスウ、と呼吸をして落ち着けた後。片コブシを額に叩きにかかる。

それはリズムにのつて。のつて。……のつて。

1回。ボグツ。1。

1回。ボグツ。2。

1回。ボグツ。3。

1回。ボグツ。4。

1……。

「…」

あずさの振り下ろした手を受け止められる。最後の攻撃は防がれ

た。「！」

受け止めた、骨に薄皮がくつついているだけの屍のような手の向

「う。敵の顔が……ニヤリと笑う。

## 999 【行く末】

最後の一撃を食い止められてしまつたあずさは、焦燥にかられた。  
(しまつ……)

クロスになつた両者の腕は、ジッとしたまま動かない。「……」

「あづさ！」

竜代も不味い顔をして今にも飛び出そうと、一步片足を後ろへと下げる。しかし意外な事に敵、野獸は特に何かをする気配はなかつた。

「抵抗しねえよ。……ひとつかふたつ、言わせてくれ」

野獸は腕を静かに下ろし、暗く冷たい廊下へと仰向けに寝そべつたまま。まずは竜代にと話を始めていった……。

「あんたの研究資料を読んだんだが……なかなか興味深かった」

竜代へと化けた野獸は竜代を捜す。あづさにも、授業をしていた教室やマンションの自室で会つてゐる。竜代の居場所を見つけるため、残されたものには徹底的に目を通していたのだった。

「『バグ化生物の再生』か。上手くいけば越したこたあねえよ、嘆きのようにも聞こえる。

「どうも」「どうも」

話を聞きながら、あづさのそばへと来た竜代は素つ氣なく返すだけだつた。野獸はフ、と軽く笑う。

「俺も思つ……バグ化の原因は、新因子である“感情”だと。あんたはすでに突きとめていた。突きとめていたんだな……」

力なく寂しそうに笑つた後は、目を細めていく。皺くちゃな皮膚は、憐れにも思えてきていた……見守るあづさには。「……」

「妨害する奴らの方が多い。よつて研究は容易に進まない上に、実現なんて雲の裏側だがな」

そう言つた竜代も何が楽しいのか、微笑み程度に笑つている。

諦め、でも続行、見えぬものを追う、それが夢……地上からでは

見えない雲の向こう。竜代の心中を駆け巡る。

「お前が投げつけてくれた液体のおかげで俺は、この世界を僅かにでも味わう事ができた。感謝する……変だな。おかしそぎる。

感謝、なんてなあ。……それと

ギョロ、と湿つた眼球を横へと運ばせ、あずさの方を見た。とても喜ばしく。

「覚えてるか。……嬢ちゃん、あんたが成功したら、と化けた俺に笑いかけた時だ。俺はあんたらを心底応援したくなつたもんでな……だからよ。頑張れよな、2人とも……」

聞いたあずさの声は次に小さく。吐き出される。

「バグ化は あなたのせいぢやない……」

その声は震えていた。喉の奥に宿して出た音は、上手に発せられなかつた。

その理由は 。

「涙、か。嬢ちゃん、あんたも体の中に新因子がプログラミングされてんのかい？ ハツハツ、これからが楽しみだ」

小動物くらいなら丸呑み可能なのではといふくらいの大口で、野獸は声を立てて笑う。

本当に面白そうに、自分の身を笑う。いつまでも。

「ふはははは……そうだそうだ。人質なんざとつたって、無情なフイギュア・サークルの奴らには関係ねえかと思つてたんだがな。まあいい。どっちみち、どうこうするつもりもない人間達だった。隣の教室に眠らせて監禁してあるから、後で助けてやれよ」

最後に。

「さあ、どじめをさしな。人じえねえけど……バグ化人生、おさらばだ」

どじめなどさせるわけがない。

あずさは、そう思った。

「あなたのせいじや、ない……！」

ならば、どうしようと？ 何処からか問い合わせは聞こえてくる。

「あずさ、……どけ」

竜代はあずさを横へと押しやった。そして。

「1、2、3、4、……5<sup>ラシ</sup>」

5回、野獣の額を叩き義務は実行された。ドン、という弾む音の後に野獣はシユウウ……と。ドライアイスが気化したに似て、白煙を発生させながら徐々にそれは下火になつて消えていった……。

沈黙が、痛く2人を襲いしばらく続いてしまつていて。

仕方なく、竜代が空氣を相手にするように話し始めた。

「俺が今している研究は、これからフイギュア・サークルにひとつは必要なものと思われる。だが、局長達お偉方その他大勢は、決して首を縊には振らない。頑としてな……いつもそうだな。新しい発想や返ってきた原点は、いつも受け入れられない」

自分の事を珍しく語り出した竜代だったわけで、あずさは堪えられない涙を何度も何度も拭きながら。黙つて話を聞いていた。

「でもだな……いつかだ。いつかの未来にきっと、目に見える現実に……それは『証明』となつて、現れて。もしくは、表れて。くれると願う」

竜代は空を見上げて。壁ではない、何処かを眺めている。

「『バグ化された生物が原点へ再生』……俺はそう、信じている  
堰<sup>せき</sup>を切つた。

「せんせい……！」

気がつけば、あずさは竜代にしがみついていた。涙は止まらず、何もかもが怒りで行き場がなかつた。

運命なのか偶然なのか。翻弄されたバグ化生物達を、ただの『野獣』と斬り捨てるのか。お終いか。お払いいか。それらを決めるのは誰なのか。

誰が、彼らのプログラムを修正してくれる。

(これから……)

あずさは何を決定する。

(私達はこれから同様の任務を一体、幾つこなしていくのだろうか

……)

全ての答えは恐らく、ない。

数日が経つた。

あずさも竜代も、地球に居続けている。バグ化生物の処理は済み、報告も済んであずさ達はフィギュア・サークルからの連絡を待つ日々を送っていた。

「いやあ

「ん?」

あずさは、足元へやつて来た子猫を踏みそうになりながら、食べかけの食パンを全部口の中に放り込んだ。

「わっきミルクあげたでしょーーー

ここはあずさが住むマンション地下の自室。これから支度をして学校に登校する所だった。

あずさに非常になついている白い子猫は、公園であずさが気にかけていた猫。後日に様子を見に行つたあずさは驚いた。

箱は赤い液体まみれで、急いで箱を開けてみたらだ。

子猫は元気にあずさを見上げていた。白い体毛を赤に濡らさせて。これはどうした事かと考えてみるとだ。

そばに赤い飲料のペットボトルが転がつていた。中身はすでに空だつた。子猫はお腹がすいたので、これを舐めて過ごしてきたに違いない。

「……あつきたあ

あずさは笑う。子猫は、自力で生きよつとしたのだ。「ハイ  
どうつて事でもない顔をするのを見て、あずさは子猫を抱え上げる。

「行こうか猫ちゃん。私がちゃんと許可もひりつて、おつりで飼える  
よつにしてみるね」

見てくれの悪い子猫は目を小さくしてあずさの前であぐびをした。

「にいやあ～」

よく鳴いている。

あずさは、転がっていたペットボトルを拾い上げて網のゴミ箱に  
ちゃんと入れて捨てた。「ゴミはゴミ箱に」。それだけの事。

子猫はあずさの所で難なく飼われる事になった。

「さてと。行つてくるね。子猫ちゃん」「にゃあ

あずさは鞄を持って玄関から外へと出て駆け出しついた。

上層からの連絡が来ない。毎日を過ごすつちに、あずさも段々と  
心配になつてきていた。すっかり地球に馴染んできたらしい体は伸  
びて、教室の机の上に突つ伏して竜代の授業を受けていた。突如、  
竜代があずさを指名する。

「加藤！　問2！　加藤あずさ！」

だれて話を中途半端にしか聞いていなかつたあずさは慌てて飛び  
起きあがつて起立する。「はい！」

しかし問2は教壇のボードを見てもわからない。

「ええーっと…… × = 5 ……？」

「放課後、職員室に来るよ」

竜代の刃物のような鋭い返し。あずさの背中は凍りついた。

(ひええええ……)

お叱りの宣告を受けたようで、青白いあずさの顔にタテ線が幾十  
にも仲良く並んで入つていた。以前、授業中同じよつに設問の解答  
を間違えてしまつていたあずさ。実はあの時、教壇に立つていたの  
は竜代に化けた敵だった。堂々と恥をさらしてしまつた事になる。

その事も思い出しながら。あずさが机の上で重力に逆らえず沈ん  
でこるうちに、授業の終了を知らせる電子音が校内中に鳴り響いた。

ポリエチレンポリプロピレンポリアセチレン。本日最後の授業が終わる。

「加藤さん！」

放課後。あずさは鞄の中へパソコンを入れて帰る準備をしていると、後ろから声をかけられた。髪が外ハネの女子。四葉のピン止めを今日は2本つけている。

「え？」

キヨトンとしてあずさの手が止まつた。外ハネの女子は元気にはしゃいでいる。

「これから職員室に行くんでしょ？ その後一緒にどこかに寄り道して行こーよ。終わるまで待つてることー。」

と、誘われたあずさだった。

意外な事を言われて、あずさの顔はますますキヨトンとしてしまい返事が遅れてしまった。

「う、うん！」

やつと出た声を満足そうに聞いて、外ハネの女子は「一七一四」と顔で手を振つて廊下へと向かい出して去つていった。「じゃー、待つてるしね！」

鞄を持ってあずさも廊下へと向かつ。とても照れながら。

(初めての地球、初めての学生、集団生活、初めての……友達)  
思つた途端いきなり、サッ……と。あたたかくもない木枯らしが心にまで侵入して吹いてきた……。

(でも……もう……)

職員室へ。伝つていいく廊下やすれ違う生徒や教師。目的の場所へと近づいていくうちに、あずさに、所詮は想像でしかない喪失感がつきまとつていぐ。

(もつ……世とはお別れなんだうつな。任務も終わったんだしき……)

…)

これからあずさ達はファイギュア・サークルに帰る。せっかく馴染んだ居場所を捨てて。それがあずさには言葉にはならないほど寂しく、例えようがないほど苦しかったのだった。

気持ちまで下にかかる重力に沈んだまま、職員室にいる竜代の元へ。

しかし竜代が、それら全てのありとあらゆる憂鬱ううきょを一掃して、思い切り吹き飛ばしてくれたのだった。

「任務続行だ、あずさ」

あずさは竜代が座る傍らで、田を真ん丸にして「え！？」と驚いた声を上げた。

「『地球におけるバグ化生物の排除』 上部からはそう通達がきた。俺達は今後、延長してこの生活を続けていく。ファイギュア・サークルでこちらのバグ化生物ポイントがわかり次第、こっちに知らせてくれるそうだ。俺達はそれを受けて、奴らを排除していく」

竜代はデスクに手をついて立ち上がった後、あずさの横を通り抜けた。片手には書類の束、もう片手は遊びながら振り回して握り空気を持つ。

「体のいい厄介払いかもしけないが、ちょうどいい。自分の研究ができるし。気ままに過ごせるしな……ふふ」

肩を回した方の手は、やがて凝りもとれて軽くなっていた。あずさは竜代を見ながら、怒られなくてよかつたと胸を撫で下ろしていた。

束の間、竜代は静かになつてぼうつとしていたが、あずさの方に振り向いて悪戯いたずらでも思いついたような顔をした。そして得意気に言い放つ。

「……一泡吹かせるぞ」

あずさの表情がパツと明るく花開く。さらに竜代は付け加えて言った。

「あんの頑固ジジイもをな！」  
田は、生き生きと輝いていた。

「はい！ 先生！」

楽しそうに。嬉しそうに。  
それが夢だ。

皆に行動を起こさせる。

……

時はいつかの未来。

そして何処かにある、根源が数字の場所『フイギュア・サークル』

物は全てプログラムで出来ており、一度バグると元には戻れない。  
『決定』から逸れた者よ、逃げた者よ。捨てられた者よ。ここは。  
バグる事など許されない世界だ。

一人の天才は、バグ化からの原点への再生を、夢、見ていた。夢  
のリングを描いていた。

されど。

彼を理解できる者はいなかつた。

だからだ、神よ。願わくはただひとりでも、彼を理解できる者の  
存在を認めてほしい。

たつたひとりでいい。ひとりでも。

……ひとり。

未来に光さす者の存在を 手に入れる。

『感情』は新因子ではない、きっとある。誰にでもある。論より証  
拠と、目に見える。

さあ、見てほしい。天才の描くリングを。恐らくそれは皆既日食  
で輝くコロナのようだ。ぜひ見せてほしいと。願う。天才達の未来  
に。

光あれ。

❀END❀

## 999 【行へ末】（後書き）

「読了、ありがとうございました。

思ひ所いろいろなのですが、楽しめて頂けるだけで満足です。

さてと、おしゃべりはここまでで後はブログで。

企画の監さん、御疲れ様でした。あゆみかんよつ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9816e/>

---

さんすうリズム

2010年10月8日15時32分発行